

# 京都市 令和2年度完了報告書

## 1. 調査研究概要

本市では、新学習指導要領の趣旨の実現を図るため、移行期間の初年度である平成30年度から、全市立小・中・義務教育学校で先行実施し、カリキュラム・マネジメントの確立に向けて、学校教育目標における育成を目指す資質・能力の見直し、教科等横断の関連単元配列表の作成など、各学校において全教職員の共通理解のもと、取組を進めてきた。

しかしながら、多くの学校では、カリキュラム・マネジメントとは具体的にどのような実践をしたらよいのか、「主体的・対話的で深い学び」との関係がわからないなどの声が聞かれた。また、教職員の働き方改革が喫緊の課題となる中、カリキュラム・マネジメントに取り組むために、時間外勤務が増えるようなことがあってはならない。そうした危機意識のもと、全校の管理職、教務主任、研究主任を対象に、カリキュラム・マネジメントにかかる全市研修の開催や、カリキュラム・マネジメントの実施手順や関連単元配列表の作成方法等をまとめた独自リーフレットの作成・配布等に取り組んできた。さらに、先行的な実践事例が必要であると考え、本調査研究事業を受託し、校種、地域特性、児童生徒の実態等が異なる京都市立葵小学校、太秦中学校、向島秀蓮小中学校の3校において、国立大学法人大阪教育大学大学院連合教職実践研究科・田村知子教授、京都橘大学教職保育職支援室・廣瀬忠愛教授の指導助言をいただきながら、実践研究に取り組んだ。

具体的には、汎用性ある取組となることを意識し、校内体制の見直し、年間計画の構築はじめ、具体的な実践・検証の方法、児童生徒の変容の見取りを視点にしたマネジメントサイクルの手法、働き方改革につなげる仕組みづくりなどを明確にしながら、プロセスを重視した実践研究を進めてきた。

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、長期の臨時休業措置をはじめ、学校教育活動が制約されることも多く、思うような研究・実践が進められないこともあったが、各実践校から「制約がある中だからこそ、前例踏襲ではなく、これまでの“当たり前”をゼロベースで見直すことにつながった。」「児童生徒の学習保障の観点から、各行事や取組の要否、授業のあり方等について、例年以上に真剣に考え、知恵を絞ることにつながった。」など先行き不透明な状況を前向きに捉え、より効果的な取組となるよう精力的な実践研究が進められた。

各実践校が指定2年間で取り組んだ成果・課題等について、プロセスとその手順を大切にしながら、時系列にまとめた手引書として「カリキュラム・マネジメント実践報告書」を作成し、本市の全校に配布した。本調査研究で取り組まれたカリキュラム・マネジメントの“実際”が広く共有され、本市全体でカリキュラム・マネジメントの充実が図られることを期待している。

### (実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
6月	○新型コロナウイルス感染症対策に伴う臨時休業期間を踏まえた令和2年度教育課程の編成及び実施 ○実践3校で本研究に係る推進委員会等を組織／研究の方向性等の共有

	○本調査研究事業の再開を踏まえた「実践3校交流会」兼「カリキュラム・マネジメントアドバイザー（本市担当：田村知子教授）相談会」の開催
7月	○実践3校で校内研修等による研究の推進
8月	○中間報告に向けて実践校で取組検証
9月	○カリキュラム・マネジメント検討会議①（中間報告）
10月	○実践校で公開授業や研究発表会等を実施
11月	○教育委員会で各実践校の取組検証
12月	○文部科学省カリキュラム・マネジメント事業ヒアリング（Zoom会議）
1月	○「カリキュラム・マネジメント実践報告書」の作成
2月	○カリキュラム・マネジメント検討会議②（最終報告・総括等）
3月	○「カリキュラム・マネジメント実践報告書」全市立小・中・義務教育学校に配布 ○「完了報告書」「完了決算書」の作成・提出

## 2. 調査研究の内容

### 実践校【 京都市立葵小学校 】

#### (1) 研究テーマ

- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

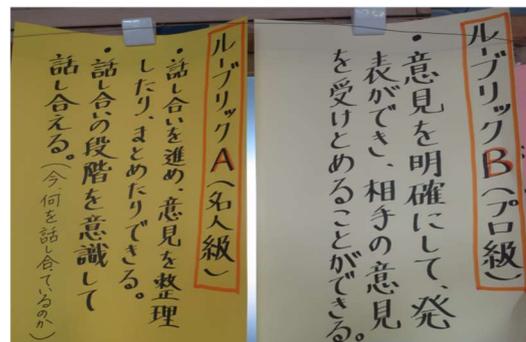
#### (2) 調査研究の内容

- ・全教職員と地域・保護者の代表者にも参画いただく「葵戦略会議」において、SWOT分析の手法を用い、自校児童の強み・弱みを焦点化し、学校教育目標を見直すとともに、児童に付けたい資質・能力を明確にする。（令和2年度は学校教育目標を「友に学び 共につくる 葵校」、育成を目指す資質・能力を「人間関係力」（自律・協働）と設定）
- ・学年会（週1回）を単位に取組の共有や見直しをすすめるなど、常に小さなPDCAサイクルを回しながら、効果のあった取組等を研究委員会や校内委員会で共有し、学校全体でPDCAサイクルの循環を図る。
- ・どうすれば効果的に「人間関係力」が伸ばせるかという観点から、学年ごとに重点教科・重点単元を設定し、必要な教材や準備物まで明示した関連単元配列表を作成したうえで、職員室に提示するなどの可視化を図り、常に見直すサイクル化を図る。



- ・「総合的な学習の時間」を軸とした教科横断的な展開の中で、各授業で「対話の時間」を意図的に設定し、児童が対話の有用性を実感することで、必要なスキルの習得のため、主体的に課題に向かっているかなどの見取りを重視する。また、年間を通じて、自身の到達状況をより自覚化・可視化するためのワークシートを活用した振り返りの充実を図る。

- ・客観的に児童の変容を見取るためにルーブリック（あおいG l i d）を作成し、児童と共有するとともに、児童自身にルーブリックを作成させるなど、より児童目線にたった評価項目や基準の妥当性等について研究を深める。



### (3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

#### ■成果

- ・教職員が目的に向かってチームで働けており、必要なものが明確になった分、労力に見合わない取組等が減った。
- ・1時間の授業のねらいにどのように迫るか、単元を通して児童にどのような力を付けたいか、年間を通して児童のどんな姿を望むかを考えて授業や行事に取り組む教職員が増えた。
- ・学年会を中核にカリキュラム・マネジメントを進めているため、学年で授業内容の検討や共有が進み、授業力の底上げと教材の共有による授業準備の軽減が図れた。
- ・「対話の時間」をベースにカリキュラム・マネジメントを進めたことで、教職員の児童の見方や児童同士のお互いの見方が変わってきている。
- ・児童が「対話の時間」で学習したことを生かして、自分たちでトラブルを解決する姿や、相手の言動の奥にある願いを探ろうとする姿が見られる。
- ・「自分を適切に評価する力」を付ける授業として、児童が自ら課題を設定し学習計画を立て、教師とともに目指すゴールの姿を設定することで、何ができて何ができなかったか適切に振り返ることができる児童が増えた。

#### ■課題・改善方策

- ・取組や成果を随時共有すること。
  - 「ほっとはあとボード」を職員室に設置し、研修の振り返りや日々感じたことを掲示できるようにしている。
- ・個人によって取組に対する温度差がある。
  - 学年会をどのように進めていくかが重要になる。すべての教職員にとって安全・安心の場になるように粘り強く対話をしていく必要がある。
- ・人的物的資源の活用については、学校の環境によって差があったり、新しく開発するのに時間がかかったりする。
  - 何が必要かカリキュラムを見直す中で、必要なことについては全教職員で取り組む。



#### (4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	学年会の設定 第2回校内研究会（働き方改革部会・年間計画見直し）
7月	第3回校内研究会（授業ラボ・対話ラボの提案）
8月	第1回授業ラボ 第1回対話ラボ 第2回ファシリテーター研修（講師：渋谷先生）
9月	第2回対話ラボ（怒りのワーク） 第4回校内研究会（2学期の研究の進め方）
10月	第2回授業ラボ（ループリックの作り方）
11月	第3回授業ラボ（社会科の課題設定・学習の流れ） 第3回対話ラボ（人生の輪）
12月	研究報告会準備
1月	研究報告会
2月	働き方改革部会（振り返りと評価）
3月	葵戦略会議（今年度の総括と来年度について）

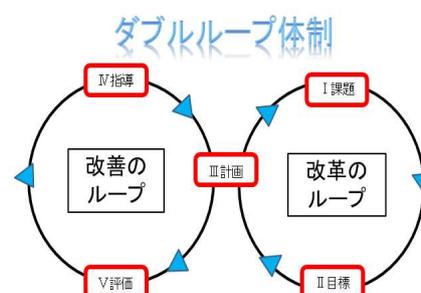
#### 実践校【 京都市立太秦中学校 】

##### (1) 研究テーマ

- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

##### (2) 調査研究の内容

- ・校内に「カリキュラム・マネジメント推進委員会」を設置するとともに、教科等横断的な視点の中核となる「総合的な学習の時間」を充実させることを目的に「総合的な学習推進委員会」を設置する。また、組織的かつ計画的な取組の推進を図るため、「改善のループ」と「改革のループ」を同時に回す「ダブルループ体制」を組み、実践の質の向上に向けたPDCAサイクルの確立を図る。



- ・すべての教育活動で「言語能力」の育成を意識するため、学年会や教科会で意見交流するなど、全教職員で関連単元配列表を作成し、職員室に掲示するなど可視化を図る。

・「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、地域の方や「太秦映画村」などの近隣施設等の外部機関とも連携し、実社会で求められる資質・能力の示唆を頂きながら、「総合的な学習の時間」や各教科はもとより、学校行事・生徒会活動・部活動等においても、生徒が自らの意見や考えを伝える場の設定、感想やアンケートなど振り返りの工夫を行い、体系的・探究的な学びへとつなげる。



・校区内の小学校の育てたい資質・能力や目指す子ども像との共通点を生かしながら、小中9年間を見通した取組を行う。

### (3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

#### ■成果

##### (1) 生徒アンケート（令和元年11月調査）

全校生徒（562人）を対象に学校教育目標に対してのアンケートを実施した。また、令和元年4月に3年生対象に行われた全国学力調査での生徒質問用紙の中から特に研究主題に関係の深いものを3つ絞り、令和元年11月に再度アンケートを実施した。いずれの項目も肯定的な回答の割合が増え、取組の成果が見られた。

##### (2) 教職員アンケート（令和2年1月実施 教職員38名）

「学校教育目標」や「育成を目指す資質・能力」は教職員全員で作り上げ周知徹底できており、学校として目指す方向性がこの2年間で明確にできたことは大きな成果だと言える。アンケートでは、多くの教職員が、カリキュラム・マネジメントと学校評価の結びつきを意識した項目において、「言語能力の育成を意識した授業を行っている」「カリキュラム・マネジメントを進めることによって学校運営の組織化、組織の一体化が進んでいると思う」「カリキュラム・マネジメントの研究指定を受けて学校のプラスになった」と回答しており、一定の成果がみられた。その一方で、「できていない」「そう思わない」という教職員もいることは課題であり、分析・改善していきたい。



項目において、「言語能力の育成を意識した授業を行っている」「カリキュラム・マネジメントを進めることによって学校運営の組織化、組織の一体化が進んでいると思う」「カリキュラム・マネジメントの研究指定を受けて学校のプラスになった」と回答しており、一定の成果がみられた。その一方で、「できていない」「そう思わない」という教職員もいることは課題であり、分析・改善していきたい。

##### (3) 学習確認プログラム結果比較

研究指定を受ける前の平成30年度は全教科で全市平均を下回っていたが、令和2年度は全教科で全市平均を上回る結果で、特に言語能力の育成の主たる役割を果たす国語・英語の学力が伸びていることから、一定の成果があった。

##### (4) その他

・コロナ禍の影響も重なるかたちにはなったが、授業内容や方法、行事の精選や時期の見直しが見直しができた。今まで当然のように例年行っていたことが本当に必要なのかを見直すことができた。（定期テストの回数・体育大会の種目、応援団の取組、文化祭の内容、清掃活動）

- ・学生ボランティア，校務支援員や部活動指導員，外部コーチなどを活用することで，教材準備や部活動指導の時間短縮を図ることができた。

#### ■課題・改善方策

- ・関連単元配列表を見やすく活用しやすいように，何度も教科会を行いながら改善したものを作ることができた。しかし，関連単元配列表を十分に活用した授業改善は十分ではなく，改善の余地が残った。
- ・以前は言語活動とは単にペアやグループで話し合うことのように捉えがちであったが，各教科特有の言語能力とは何かを話し合ったり，ピクトグラムを指導案に盛り込んだりしたことから少しずつ意識が変わり，言語活動そのものの改善が進んでいる。しかし，そこで身に付けた言語能力の評価を行っている教科はまだ少ない。授業で学んだ知識や技能を使って，思考・判断・表現するパフォーマンステストの実施と各観点に応じた評価が正確にできるよう，研修・協議を重ねていきたい。
- ・令和2年度は，総合的な学習の時間において，地域調べに着手し，映画の街として名高い地元ならではの学習を行い，人権学習とも関連させた中学校3年間のカリキュラム・マネジメントを確立させる予定であったが，コロナ過で外部団体との交流が難しく，休校期間もあり，思うように取り組めなかった。引き続き実現の可能性を探りたい。
- ・グループ学習や対面交流の自粛を受けて，いわゆる講義型の授業がどれだけの学習効果が見込めるかは不透明である。1人1台端末の有効活用など，できることを工夫して実践していく必要がある。
- ・学生ボランティア，校務支援員や部活動指導員，外部コーチなどを活用することで，教材準備や部活動指導の時間短縮を図ることができたが，まだ働き方改革が十分に達成できている状況にはない。

#### (4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	目指す教職員像ワークショップ
7月	各分掌中間反省会 目指す教職員像決定
8月	夏季小中合同研修会 学習確認プログラム分析
9月	体育大会取組・反省
10月	文化祭取組・反省 小中合同研究報告会
11月	3年生修学旅行 研究報告会反省会
12月	生徒会オープンスクール
1月	年度末反省研修会 学習確認プログラム分析
2月	小中主任会
3月	新学習指導要領の研修

## 実践校【 京都市立向島秀蓮小中学校 】

### (1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

### (2) 調査研究の内容

- ・これからの社会を生き抜くため、義務教育修了段階で付けたい力を「未来を拓く力」、そして「考える力」「発信する力」「コミュニケーション力」「自律的活動力」「多様性を受容する力」「折れない力」という6つを育成したい資質・能力として明確化し、厳しい地域・学力実態を踏まえて、日々の授業改善を核としたカリキュラム・マネジメントを進める。
- ・特に研究で焦点化する資質・能力を「考える力」「発信する力」「コミュニケーション力」に設定し、これらの資質・能力を育むため、「秀蓮授業づくり3ステップ（振り返りを起点とした授業づくり）」を授業デザインのスタンダードとして全学年・全教科で進める。具体的には、育てたい資質・能力の目指す具体的な姿や生徒の実態を可視化した「新資質・能力育成指導演」を共通の指導演様式とし、どんな振り返りを書かせるのか、ゴールから逆算して授業をつくる考え方を日常の授業に浸透させるとともに、振り返りの具体的なイメージを教職員と児童生徒で共通理解できるよう進める。
- ・小中一貫校の強みを生かし、タテ（学年）とヨコ（教科）を教科部会・学年部会の融合によりつなぎ、義務教育学校として9年間を俯瞰的に捉える仕組みを構築することで、3つの資質・能力をあらゆる場で一貫性をもって育てる。さらには、以下、独自の「3つのカリキュラム・マネジメントの柱」を踏まえた、9年間を見通した「つながり」のあるカリキュラム構成に基づく日常的な取組の見直し・改善に組織的に取り組むことで、教職員の同僚性やつながりを強める等、組織づくりとしてもカリキュラム・マネジメントを活用する。



#### 【3つのカリキュラム・マネジメントの柱】

学びのカリキュラム・マネジメント（授業力向上による一人一人の確かな学びの実現）

人育ちのカリキュラム・マネジメント（豊かな心・人間性を育む教育）

人育ちのカリキュラム・マネジメント（子ども・家庭・地域・学校がともに育つ教育）

- ・資質・能力を明確にした授業作りや、教育活動を俯瞰的にマネジメントする力の向上を目指す校内研修として、資質・能力に対しての検証を軸とした研究協議、研究全体の方向を確認する場としての「向島秀蓮の研究について語ろう会」等、自校の強みを生かした研修の場を設定する。



### (3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

#### ■成果

- ・6つの資質・能力を育成することが学校教育目標の実現につながっているという意識が、教職員の中に生まれ、「向島秀蓮の子ども達をどのように育てるか」という俯瞰的な視点につながっている。
- ・教科部会を通して前期課程の教職員と後期課程の教職員のつながりが強くなっている。互いにわからないことを尋ね合い、共有する関係ができてきた。
- ・「向島秀蓮授業づくりスタンダード」や「新資質・能力指導案」によって、授業の作り方が統一されてきた。
- ・児童生徒が授業の中で振り返りをするのが習慣化してきたことで、より短時間で振り返りができるようになってきた。
- ・児童生徒が授業において、「考える力」「発信力」「コミュニケーション力」のどんな力を伸ばしているのかを意識して学んでいる様子が、振り返りの場面に表れつつある。

#### ■課題

- ・教科部会で9年間の縦のつながりはできてきた。しかし、「教科と教科」「教科と学校行事」などの横のつながりはこれから整えなければならない。  
→「教科部会」と「教科主任会」「学年部会」の役割をより一層明確にしていこうと考えている。

教科部会	…	独自カリキュラムを具体的に教科単位で考える組織
教科主任会	…	教科の横のつながりを俯瞰的につなぐ組織
学年部会	…	児童生徒の発達段階に合わせて必要な力を明確にして、カリキュラムについて点検する組織

- ・児童生徒に3つの資質・能力を支えるための基礎・基本の力をどこで確保していくのか。  
→帯時間を有効に活用するとともに、独自カリキュラムの一部試行などを行っていききたい。  
授業を通しての学びと授業外の学びをマネジメントして、サイクル化していく仕組みを整えていきたい。
- ・児童生徒自身が自己評価で自分の育ちを実感できるようにする仕組み作りが必要。  
→授業外の場面で、自分の育ちを定期的に振り返り、友人と共有する時間を確保する。
- ・6つの資質・能力について、児童生徒にしっかりと浸透していない。  
→児童生徒自身が考える6つの資質・能力についての自己評価をする場面をつくる。

### (4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	資質・能力育成指導案の検討
7月	新資質・能力育成指導案研修会 資質・能力6つの姿 生徒アンケート①
8月	夏季研修会 授業強化月間（9月）の指導案検討会
9月	授業強化月間（各教科部会テーマを具現化した授業づくり）

	校内授業研究会の指導案検討
10月	校内授業研究会（授業強化月間の振り返りを活かした授業づくり） 田村知子教授からの講評
11月	研究の成果物でこれまでの研究を振り返る研修会
12月	年度末総括に向けたアンケート調査
1月	取り組みの見直しと来年度方針の案を作成 田村知子教授講演会
2月	来年度の方針を提案 資質・能力6つの姿 生徒アンケート②
3月	研究の成果物DVDへの記録

### 3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

（○：成果，●：課題）

- 「カリキュラム・マネジメント」への正しい認識の広まり  
カリキュラム・マネジメントは、まったく新しい方法を導入することを目的とするものではなく、これまで各学校で取り組まれてきた教育活動の質の向上を図るための様々な取組を、改めて見直し、整理するといった意味合いが強いものであることが実践地域全体で醸成してきており、カリキュラム・マネジメントが目的化せず、カリキュラム・マネジメントによる有機的な組織のあり方の検討が進められている。
- 教職員の意識の変革  
学校ビジョンの共有，そして教職員全員で改めて検討した学校教育目標のもと，自校で重点化した資質・能力を育成するという明確な目標によって，担当教科や学年が異なっても，「自校の児童生徒にどのような資質・能力を育てるのか」という視点に焦点化されることに教職員一人一人の意識が変革されてきている。
- 授業の在り方の変革  
各教科等において，単元や授業を通じて，いかに資質・能力を育成するかという意識が根付いてきている。対話的な場面等についても，漫然と授業に取り入れるのではなく，効果的な場面設定などについて，教科会等で積極的に協議が行われるなど，授業改善，学校組織の活性化につながってきている。また，めあてや振り返りの充実，授業の意義や意味を感じられることによる児童生徒の主体的な学習意欲の向上，確かな自信・有用感の醸成などが図られている。
- 教職員のつながりや同僚性の高まりによる組織力の向上  
カリキュラム・マネジメントを確立していく過程で，教職員のつながりや同僚性が以前よりも高まり，組織力が向上している。
- 働き方改革の推進  
学校のビジョンを共有し，目指すゴールを明確にすることは，これまでの“当たり前”を見直す契機ともなり，一つ一つの取組等が本当に効果的で必要な物かどうか，各行事や取組の是非等，精選が進んでいる。
- 教職員の意識差，モチベーションの維持・向上について

依然としてカリキュラム・マネジメントに対する教職員一人一人の意識やモチベーションの差が大きく、成果のフィードバックの工夫など、教職員が有用感を保てるための取組へと発展させることが課題である。教職員の意識改革にあたっては、校長からのトップダウンではなく、ミドルリーダーや若手教員によるボトムアップ型により、一人一人の教職員が当事者意識を持つことが望ましいと考えている。

●評価について

カリキュラム・マネジメントが効果的なものとなっているのか、評価基準や指標の設定について、その妥当性を含め、課題が多い。児童生徒の変容した姿を成果として、「見える化（評価項目の設定にあたっては、児童生徒の言葉に近づけることやピクトグラムを活用など単純化・可視化できる環境を整えるなど）」することや、ルーブリックの作成・活用など、本調査研究での各実践校の取組例を踏まえつつ、今後も実践地域全体で多面的に研究を進めていきたい。

●人的・物的資源等の効果的な活用について

カリキュラム・マネジメントは動的なものであり、協働的に改善し続けるものであることから、「正解」を求めるのではなく、各学校なりの「最適解」の模索を、教職員だけでなく保護者や地域、児童生徒とも連携しながら、継続していく必要がある。